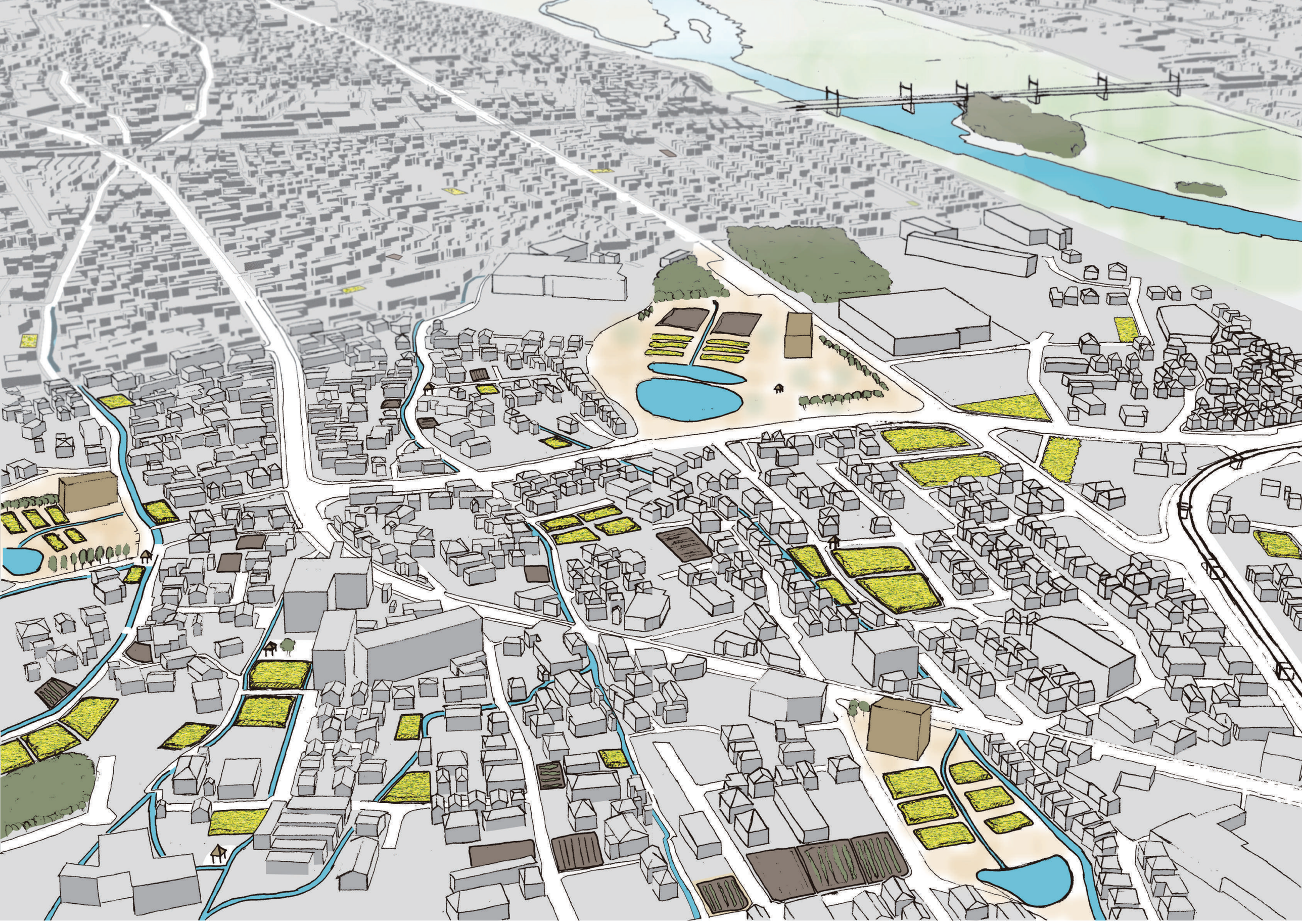


誘い - いざない -

過去を郷愁して外見上の価値に捉われるのではなく、現状を受け入れてまちの更新と共に地域財産の価値を波及させるカタチを提案する。

1. 農業風景の演出

暮らし中に農業風景を演出し、
風景の価値を未来に継承する空間を作る。

2. 心落ち着く空間への誘導

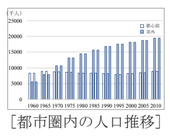
市民が無意識のうちに心を落ち着かせる空間に迷い込めるよう
用水が案内人となるべくシステムを整備。

0．都市の郊外化

戦後から 1970 年代半ばまでの間は、都会暮らしが豊かさの象徴とみなされ首都圏に向けて大量の人口が流入した。こうした急激な人口膨張により、都市では住宅数が絶対的に不足し、郊外における急速な宅地開発を招いた。その結果、今日に至るまで文化的な価値のある田畑や用水が失われてる。

［都市の高層化］

［都市の郊外化］



［都市圏内の人口推移］

1．計画地（東京都日野市）

市街化の波に飲まれながらも田畑と用水がセットになって現存する東京都日野市を計画の対象とする。日野はかつて「東京の米蔵」とまで呼ばれ、人々は網目状に掘削された用水からの恩恵を多く享受していた。高度経済成長期の宅地開発によりその大部分を失い、残された用水は宅地の影にその姿を潜め、人の生活からは疎遠なものとなってしまった。

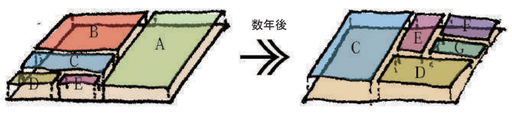
［在りし日の名残］

［現在の農地風景］

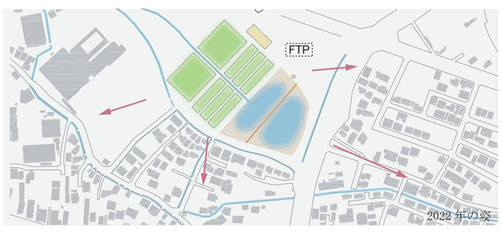
［暗渠化した用水］

2．FTP の姿

「ちょっと土いじりをしたいけど都会に住んでるからなかなか出来ない」「老後の田舎暮らしに憧れるけどうまくやっていけるか不安」そんな未来の farmer に Farmers Training Park(FTP) を提案する。FTP は将来趣味で農業に携わりたいと考えている人を訓練し、farmer を育成するためのスポットだ。FTP の効果は面的に広がり、市民が再び農業にそして用水に関心を向けられるコアスポットとなるだろう。

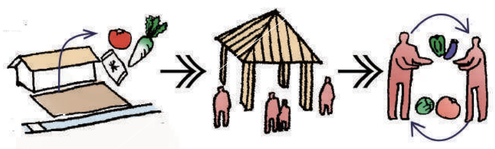


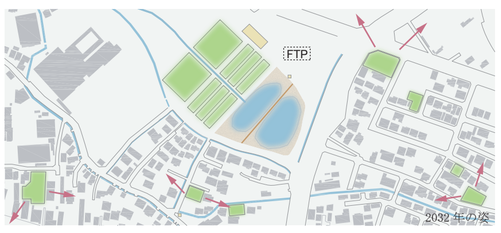
farmer の成長と耕作地の分配は連動する
（例：A さんは FTP を卒園、C さんは成長し耕作面積が拡大）



3．農地コミュニケーション

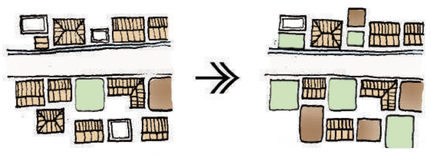
FTP を卒園した farmer はやがて、自宅の庭先や近所の農地で本格的な農業を始める。farmer は、街中の用水の分岐点に点在する四阿（あずまや）に自作の作物を持ち込み、互いに交換する。四阿は物々交換の場としてだけでなく、大人から子供までが自然に集まるコミュニティーの場としても機能する。

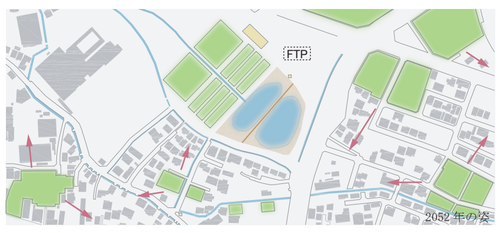

収穫する　集う　交換する



4．面的に広がる農地　風景

日野市の人口減少が加速する頃には、FTP を卒園した farmer や farmer の弟子たちが、古くなった住居の空き地で農業を営み、やがて農業の街としての色を取り戻す。街は縦横無尽に掘削された水路とともに、経済の成熟を夢見て街が広がった時代から、かつての農業と水と人が近かった次代の姿へと新陳代謝する。


まちの更新により農地は広がる



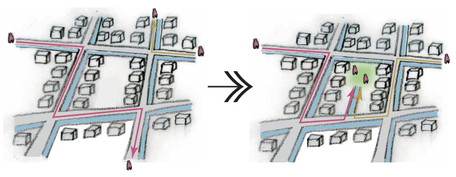
1567 最古の用水掘削
1955 頃～ 用水の水質悪化
1965 減反政策
1970 日野市人口 10 万人突破
2017
2022
2025
2032
2042 人口減少開始
2052

5．山柴水明の地を目指して

a）心の拠り所となる農業風景

複雑に成熟した都市空間に初めて足を踏み入れた訪問者は、身の回りに潜む野生的な空気を感じて衝動的に不安な気持ちに駆られるため、自然と心の置き所を探しに歩く。現在の郊外都市では、整然とした住居が軒を連ね、訪問者の心の置き所となる風景は不足している。

都市として有すべき機能は確保されつつも、まるで用水に導かれるように、人が心を落ち着かせられる場に自然と迷い込める形態をなした空間へまちは変質してゆく。



b）実りの継承

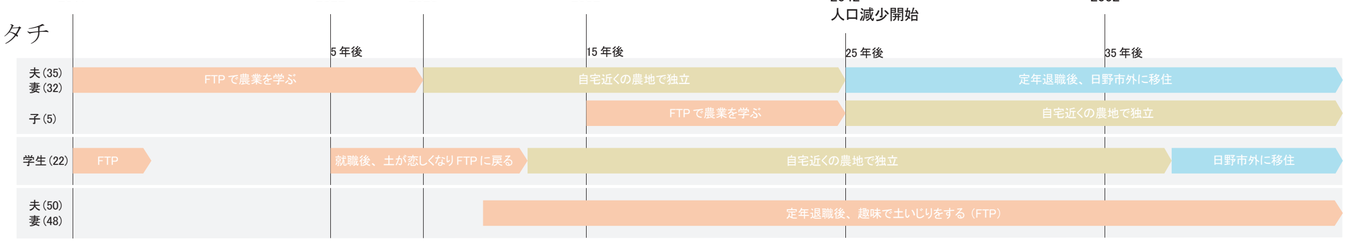
田畑や四阿、用水を不用意に配置し、あたかもかつての農村風景を部分的に再現したような計画をしてもそれは虚構を不必要に並べたに過ぎない。住人の意に介さずして整備された虚偽の自然的風景からは、住人更には自然に対する意識の高い farmar の心にまことらしき平穏を得ることが出来ない。当然我々はそのようなマネジメントはしない。

あくまでも FTP 以外の農地は、住人の意思によって時代を重ねるごとに広がってゆく。FTP の整備による収穫物は、市民に土、水に対する愛着を思いださせるきっかけを作ることに過ぎず、地域財産の価値に気が付きまちを更新させてゆくのは市民である。FTP の効力により農地風景への愛着を思い出した市民が、自らの手で農地風景を再び作り出してゆくのである。日野の地域資源である用水に誘われたその先に、山柴水明の地は生まれるのである。

6．暮らしのカタチ

FTP は、farmer のライフスタイルに合わせて利用できる。年を重ねるごとに farmer は一人前の農家として成長し、FTP を卒園した後も場所を変えて農業に携わる。

farmer の入れ替わりによっても、まちは新陳代謝してゆく。



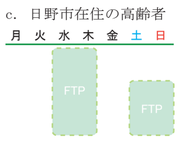
a．23 区在住一般家庭

23 区内在住で都心に勤務する一般家庭の場合、週末に泊り込みで農業に携わることができる。力を合わせて作物を育てることで家族の絆が深まり、子供が土に関心を持つ絶好の機会ともなるだろう。

b．学生

学生は休暇中に FTP に泊り込みで農業を学ぶことが出来る。言わば、農業版インターンシップのようなものだ。FTP の存在により若者の間で農業が身近な存在になり、自然の大切さを学ぶ良き機会ともなるであろう。

c．日野市在住の高齢者



家庭菜園では満足できない高齢者にも是非 FTP を勧めたい。FTP は近隣住民も気軽に利用できる施設である。FTP を利用する若者が重い作業を手伝い、高齢者と作業を共有して助け合いながら農場を切り盛りすることができる。

管理施設は若手からベテランの farmer までにとっての情報共有の場として機能する。宿泊は、田植え体験や収穫祭といった単発のイベント向けの 1 泊の滞在から、本格的な農業従事者としての経験を積むために数年間の滞在まで可能である。人数は 1 人から受け入れる。

これらのシステムにより、農業を通じて年齢幅の広いコミュニティが形成される。

田畑から池までの地形が漸次的に変化するため水辺に自然と近づきやすい。桟橋を挟んで田畑とは反対側の池は、平常時の水深が 2m ほどあり、夏場はプールとして解放する。豪雨時には、水を一時的に貯水させる遊水池の潜在的な性能を発揮する。このとき、最大貯水量に達すると桟橋が沈下し、FTP 内の田んぼ 1 段を残して 2 段は水につかるようになっている。

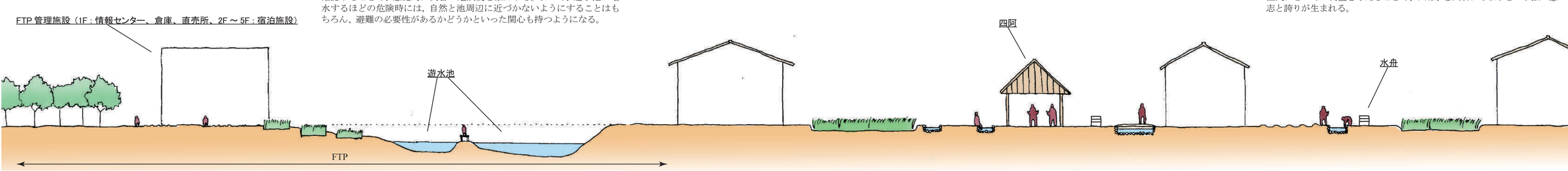
住民たちは、まちに張り巡らされた水路の水位や流速を日々無意識的に確認することで、感覚的に災害の危険度を察知する。よって、遊水池が増水するほどの危険時には，自然と池周辺に近づかないようにすることはもちろん、避難の必要性があるかどうかといった関心も持つようになる。

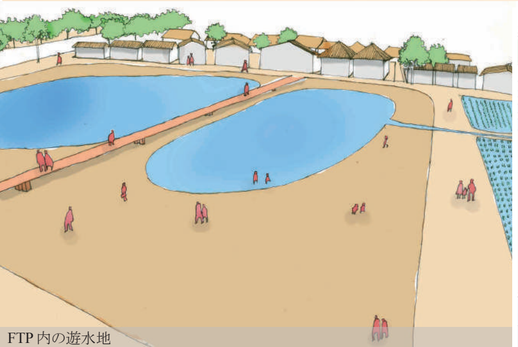
田畑はそれぞれ約 0.3ha の耕地面積を有する。本格的に農業を始めたい人、近隣の小・中学生農業体験用の大規模な耕地、単発で農業を体験したい人向けの FTP が管理する耕地（田植え体験、種まき体験、収穫祭）、家庭菜園程度に農業のノウハウを身に着けたい人向けの小さな耕地など、利用者の用途に合わせて提供する耕地面積は変化する。

水路の分岐点や、主要な水路沿いに四阿を設置する。ここでは周辺農民が収穫した野菜の物々交換や、ご近所さんたちが集まって井戸端会議ができる場となっている。子育て世代のママ友たちが子供の送迎後に集まったり、散歩コースの休憩場所となったりとまちかどにおけるちょっとした賑わい空間を演出する。

街中の用水は灌漑用水としてはもちろん、水路沿いに水舟を設置し、農具の洗浄、野菜の泥落し・冷却、洗車用など生活用水としても利用される。同じ水路を近隣住民が共有することで、公共物としての意識が生まれ、維持管理が協働でされる。また、水の流れる音や風景は人々に癒しを提供してくれる。

江戸時代から残る地域財産である用水をただ保全するだけではなく、住民にとっての利益を与えることで、日用水を大切にしようという強い意志と誇りが生まれる。

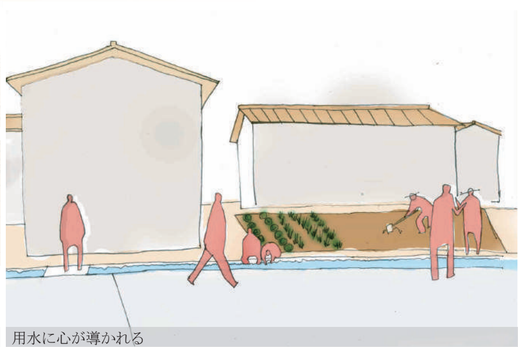



FTP 内の遊水地

FTP に実る作物

宅地に点在する田畑

四阿に集う市民


用水に心が導かれる